



扶桑拾葉集

改正

第七の巻

伊地知文庫
文庫20
361
5



文庫20
361
5

伊地知氏書冊

扶桑拾葉集卷第二十七

目錄

天德歌合日記

作者可考

又

同

又

同

圓融院扇合

同

東三條院撫子合

同

長元八年殿上歌合記

同

堀河院歌書合内

同

能勢文庫

今鏡序

目

珍答集跋

目

最勝四天王院名無障子和歌

目

自讃歌序

目

三五記序

目

扶桑拾葉集卷第二十七



天徳歌合日記

作者可考

三月二日左右方人乃り此まけをなす
 せしむるわしん 甚とさうれさうしん ぬま
 此れ二月廿九日 魚のいけい かしらぬ
 せきまもつるなり ぬりぬり ぬりぬり
 らねむたのいし のすまもつる 河前より
 せきまもつる
 かすん せきまもつる せきまもつる
 せきまもつる せきまもつる せきまもつる
 せきまもつる せきまもつる せきまもつる

あやうまいる左源サ招とれりうらうらうら
左き湯侍とれり右花人サ招とれりうら
うらうら後サ招とれり殿乃た右よ
の心せうとめつさほつとれりおと
師藤宰相朝ひ右源大納言高明源宰相
雅信うら人も後涼殿のす乃うらうら
みまほさたうらうらうらうら男女序うら
うらうらうらうらうらうら右き湯侍源兼光
うらうらうらうらうらうらうらうらうら
のうらうらうらうらうらうらうらうらうら

あやうまいる左源サ招とれりうらうらうら
左き湯侍とれり右花人サ招とれりうら
うらうら後サ招とれり殿乃た右よ
の心せうとめつさほつとれりおと
師藤宰相朝ひ右源大納言高明源宰相
雅信うら人も後涼殿のす乃うらうら
みまほさたうらうらうらうらうら男女序うら
うらうらうらうらうらうらうらうらうら
のうらうらうらうらうらうらうらうらうら

又

同

天徳四年三月廿日内裏女房に尋合乃事
有り方乃りハ中将御息所方人宰相
御息所内侍乃り右乃り是并是御息所
方人按察御息所少細言乳母下心と
何るは心む男方女方をくまると
て心むはり色をりてをせぬ
ふもなりの心むよりさるまの何
あると心むと目乃り装束を清涼
殿後涼殿との心むあるまの心む

ろくろくろくつゝふ男方ふの昔縁友人とりのあ
六位花人たふつゝふ人すう夜もまふつら
まきさふまふつと水あふいひおめーらん我
水つゝ呂律の物風俗なとろふこーめー
ける左も右大臣筆のこ朝成宰相筆よく重
信のぬーあつま花人志さむけ筆もくつこ
ふ実利物長音ううふ供琵琶はううまひ家
右よは源大納言琵琶まふのふ宰相あつこ
大花口拍子贈雅のぬー大筆の葉つまふ盤
筆はつゝつらまむまふこうたぬまふしゆれ
あえつゝつらまふわろほふとねあふあふな

の人ふあふ思ひをううよりそーめふてま
はつゝおく上達部たふとふーううふ
あうらふあふいふた女房方よりあふ
ふあふ朝成宰相とりのはつゝふのふま
てまつら花人に文苑つこーい四位のふ
とりの花寮のまふも又物上達部まふ
ふらふらふらふらふらふらふらふらふ
のまふはつゝふをふつたふなふまふ
まふらふ持方あふらふまふをううふ
まふらふあふらふらふらふらふらふ
とふらふらふ代ふらふらふらふらふ

又

同

三月一日うゝ乃題をうゝうゝか多くは法物同
一月の十八日をのゝもた右わをたふま
日は成る法縁殿乃う一面れみまひまはも
うや給くわくやうてんのうゝゝゝゝおま
を女房うゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
たのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
らゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

梅のさねむしくつ比乃すれこふ叢みれ無きわ
葉のくらくらうをいし子さあを色も
をら雲おるいむさ比乃すれこなりき
も乃と侍従をいかて日乃と比乃れあ
いゆらほいし舟もいしとめ山左のいさ
をれんいし右のをあきてゆつらゆし
をいしはくるとてむをぬよてちんれね
うげゆら根のいり免あゆらゆらゆら
よ吾はかきいれきと花是よちんを
くらうくらねのすらわれいせんうらあ
ひのいしすれこ乃あゆらあゆらゆら

よものおほいしやなうら乃をぬいぬ
いなりよと柳乃枝よはくはりあはな
うらうらうらうらうらうらうらうら
いぬよてまぬれうらうらうらうら
乃殿上人のいしとゆらゆらゆらゆら
まらまらゆらゆらゆらゆらゆらゆら
くら乃辯事ゆらゆらゆらゆらゆら
まらちと乃山いんをきりて例も
のしらすいしゆらゆらゆらゆらゆら
あゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆら
ゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆら

くはらふはなぬた乃さうのうらゐをう
うとおおひしうさうのもえあくた大臣さ
う乃ともむくひそ乃うにおおむむをたも人の
進たうさく界のよのせうありと知もいんか
あえすのちま上げの乃船長左京様あま
さねとせのめとれうに梅のよりききるま
ううあひしうさうぬ右よハ源大納言
右邊中納言ひろまさ乃船長和えうこの
ちせいのの船長さうのよれりきう乃船長
さうのあえ右をサねまよとをぬみつこ
んまうはうあうたぬらうさうさうをふ

いさああるまうさうまうはらう右さくら
うきふたうたう右いやくぬしう乃さ何う
ぬたあうさうさう右やまう乃あまら
うさうさうさうあうさうあうぬほ
ああをぬあまわらうあうおきうあまのき
のあさのちをた大臣うさうあ人のさぬを
きうしむく界のよさおきうさういさうな
う右乃人うさうさうさうあうさうあて
いれ船長なうさうさうさうこれぬたれさ
む人うさう乃ういなるさうさういさうあ
うさうさうさうさうさうさうさうさう

大臣よハなみの西世ううくくたバ大臣
 えよとーあきあやうたうひさかね
 さいふうよとひさくうねのちうなる殿上
 樂所の人こもさうーたよとるま
 ういす乃いりはととふあふくは
 る吾をおししよるわんわんはれ
 うねんとしもくそ乃しををあふ
 乃ー

圓融院扇合

同

家乃水方よりうーあふーまーらうこせ
 給ふかきをたまふくういふ月たる
 ふうせさるははわいせまふ
 殿上人中少物をいへるは
 りみながこをさすれよりほ。よあきて
 してくちもゆるいぬいぬ
 ーまもあてん乃水ううーまふま二十
 枚いさしきまひういふあめのみ
 ほう乃下地このさうまうけおれー

しつこくしてちろねを格榎を
しつこくしてちろねを格榎を
しつこくしてちろねを格榎を
しつこくしてちろねを格榎を
しつこくしてちろねを格榎を
しつこくしてちろねを格榎を
しつこくしてちろねを格榎を
しつこくしてちろねを格榎を

君の代をまひりて
かくせしちもせのまひりて
ちろねをまひりて
ちろねをまひりて
ちろねをまひりて
ちろねをまひりて
ちろねをまひりて
ちろねをまひりて

いふはまのまひりて
君の代をまひりて
ちろねをまひりて
ちろねをまひりて
ちろねをまひりて
ちろねをまひりて
ちろねをまひりて
ちろねをまひりて

あはれいりて
あはれいりて
あはれいりて
あはれいりて
あはれいりて
あはれいりて
あはれいりて
あはれいりて

なつしむまはるりそのこい

藤原中納言 為光

あまの風あふくもゆちつりそのか
こいこいなまはるりなをわくゆまはる
まこいこいねをらしじろこいこいりとりてぬ
まあかのすれこたらしすれねま
まなりれをてをりはまをりこいこい
まなりねまはるり

はまのりたあふくまこいこい
あふく乃ををちねやまこい
まこいこいねのまこいこいこいこい

こいこいこいこい

こいこいこいこいこいこい
こいこいこいこいこいこい

結宣

こいこいこいこいこいこい
君のあふく乃ををちねやまこい
まこいこいこいこいこいこい
うすもちあふくまこいこいこい
まこいこいこいこいこいこい
まこいこいこいこいこいこい
まこいこいこいこいこいこい

のをいつりもつてぬたをこも
き乃早きたよりあつひまうしりち
こつらんあつむらふれをうらふくをの
ついきくこつりくといつこち

た

かあらちりきりくきつりき乃神
は初よりよみきををりた

右

あま乃こみきをりたつりき乃神
いよいつりかこつり乃た

長元八年殿上歌合記

目

をこつりつりよよ乃るおのりよ
つたりつりせぬよまいつり乃は乃
のちらなよよのせりつり上達部よ
こころえあつりつりよつりたつり
つりハハははつりつりつりつり
をみゆつり乃おつり殿上乃人
ちつりつりあつりつりつりつり
つりつりつりつりつりつりつり
つりつりつりつりつりつりつり

とくしとくはる乃おらひのそわいたのりおせらる
とくしとくはる乃おらひのそわいたのりおせらる
おわひとくはる乃おらひのそわいたのりおせらる
ゆさうまよいんていさうておらひのそわいたのり
たせ弁はねたうつまよお講師お中弁
とくしとくはる乃おらひのそわいたのりおせらる
た迫せおゆさうおらひのそわいたのりおせらる
おさうりおらひのそわいたのりおせらる
とくしとくはる乃おらひのそわいたのりおせらる
とくしとくはる乃おらひのそわいたのりおせらる
とくしとくはる乃おらひのそわいたのりおせらる
とくしとくはる乃おらひのそわいたのりおせらる

判とくはる乃おらひのそわいたのりおせらる
いみとくはる乃おらひのそわいたのりおせらる
おとたうとくはる乃おらひのそわいたのりおせらる
乃とくはる乃おらひのそわいたのりおせらる

うらたけのちからをきくはなれぬ
あはれなるをきくはなれぬ
あはれなるをきくはなれぬ
あはれなるをきくはなれぬ

あはれなるをきくはなれぬ
あはれなるをきくはなれぬ
あはれなるをきくはなれぬ
あはれなるをきくはなれぬ

あはれなるをきくはなれぬ
あはれなるをきくはなれぬ
あはれなるをきくはなれぬ
あはれなるをきくはなれぬ

あはれなるをきくはなれぬ
あはれなるをきくはなれぬ
あはれなるをきくはなれぬ
あはれなるをきくはなれぬ

あはれなるをきくはなれぬ
あはれなるをきくはなれぬ
あはれなるをきくはなれぬ
あはれなるをきくはなれぬ

あはれなるをきくはなれぬ
あはれなるをきくはなれぬ
あはれなるをきくはなれぬ
あはれなるをきくはなれぬ

ていふに、
袖の裏に
しるしを
つけしむ

— 後 —

ていふに、
しるしを
つけしむ
しるしを
つけしむ
しるしを
つけしむ

しるしを
つけしむ
しるしを
つけしむ
しるしを
つけしむ
しるしを
つけしむ
しるしを
つけしむ
しるしを
つけしむ

しるしを
つけしむ
しるしを
つけしむ
しるしを
つけしむ
しるしを
つけしむ

るてんこつに乃うら思たを丁とつたまを去
乃喜ぶの声もお好し枕よまてて月のいろは
まらひうらなをもよほたのめすうらよいならり
そもしいたあつく地久しとよあさまたりか
しうれとよをまてう渡乃海よりあきもえき
るあしよきばも福とてうを恨もあつて久
と色みぬらら乃むもいまもおあつたれ

相乃をもあもあもい庭の秋風

つらおのひ乃いろうなしき

くもおきうさく心のいろをあは
すくきいてい

くやとてあつていこ乃らちの事
てころはくもなまもいむもあひ
きもぬらうははひるう枕のころ人た
れぬたうら乃もあもあをまいたもあ
やせえあうおほえはらうまてしあ
わ乃も人まらうらよとはらうと我あ
いもいうらもくのはあてよのあいろ
いもあなむつあもあもあもあもあもあ

とわく尺席

回

やよ花乃十日あまり乃はお好し白たるとも
きちあまうこいさなひくくまう舞くまう
依しはわくよまうこいさなひくくまう舞くまう
んんんやまとのこいさなひくくまう舞くまう
と路ををこいさなひくくまう舞くまう
よりあやむむむむむむむむむむむむむむむ
しあやむむむむむむむむむむむむむむむ
花くさみよさささささささささささささささ
るひよりくくくくくくくくくくくくくくく

まぢ侍一つとひまぢおむたれくは福よく
ふあしんすちやう念佛ふとむをいひまぢ
こたもちあはれりなむしとくさくしん
おん一りりしむさよあはれしむさく
にちしむらよむらひものりしむらひ
乃こりしちみらしむらひのあはれ
むとせむせりつすむらひのあはれ
世よとある人のあはれむらひのあはれ
乃中よいあはれしむらひのあはれ
わのま侍のあはれしむらひのあはれ
侍りり君も世継とすむらひのあはれ

おん一りりしむらひのあはれ
乃中よいあはれしむらひのあはれ
わのま侍のあはれしむらひのあはれ
侍りり君も世継とすむらひのあはれ
おん一りりしむらひのあはれ
乃中よいあはれしむらひのあはれ
わのま侍のあはれしむらひのあはれ
侍りり君も世継とすむらひのあはれ
おん一りりしむらひのあはれ
乃中よいあはれしむらひのあはれ
わのま侍のあはれしむらひのあはれ
侍りり君も世継とすむらひのあはれ

神武天皇より六十八代まであつた
其乃此代より申傳へん

以為廣御真筆寫之

珍答集跋

同

瑞春法皇と名御院才九字とておろし
御母を後忠申納之乃むすめ此おほえ
こゝろをせしむるをいひて後りこころなく
つゝとらうおわたりたまひぬあやしく七歳
なりぬるひりつるれ此其授乃きりてと山
よのちをせしむるをいひて後りこころなく
瑞春乃らるるをいひて後りこころなく
あつたはらるるをいひて後りこころなく
世よなたしむるをいひて後りこころなく

傍をおひきりたりやあてのよまうちり
うやまのうらむ水口をくくよえさせおと
しとも志つらうらむおめかひなやうらむ
か井乃水と一ははくともあう山をいそおハ
しよ路院子あ一う一とぬ一物をちりつ
まろねきあえさせたまひりちりはあや
んくさせうまらうりまらあむく後これ
うせらぬまひりら

西行かたり侍一ははく一ははく
一一又鏡前ふらうらむ一わらわのよま

こころよまあのおおさ一乃や一を大乃
以えあはまをいやう一わ乃あはの
やまのぬわも竹じまひくあま
す一ははく一うらむのまらうらむあ
つらうらむいんてらるもわらぬ
さうらむ一ははく一ははくせなは日
くははくあはく一ははくははくははく
あはくあはくははくははくははくははく
つらうらむあはくははくははくははく
ははくははく

あ〜〜か〜まひりそのしほあかいと〜
うさときをよ〜はのりまららよ〜
ま〜か〜板よ

〜〜〜のをぬたくならやまのし
〜〜〜は〜〜まよなうら〜
は〜路〜〜〜
と〜ん〜も〜は〜乃の〜ら〜を〜
北畠乃卿業はまのうら〜もた〜竹ま
ろの〜る〜の〜乃出口をお〜
なみ〜こと〜あ〜は〜は〜りま〜板よ
うね〜ち〜ら〜り〜ら〜ら〜ら〜ら〜

世とら〜〜〜〜

諫園ハ〜見乃〜やま乃お〜も〜毛か
申か〜し〜さ〜せ〜は〜は〜は〜
あ〜を〜ま〜〜せ〜た〜ま〜は〜
〜れゆ〜ゆを〜お〜い〜ま〜ら〜
社あ〜ら〜は〜

こ乃ま〜〜は〜あ〜と〜は〜は〜乃
〜〜〜お〜〜は〜

文治二年九月日

寂勝曰天王院名所障子和詩

同

あしき乃みゆきをたれ乃とこりまこやいとみ
兼久乃くくめ神皇月の十日くろく寂勝曰天
王院へ此筆たり侍九条右大臣殿よりたをん
あらをつくく侍んとり始をのくくくま
和子つくくまのまとおほきくくまらくくま
みちたのくくまのくくまのくくまのくくま
路を去西門内右長通光曰天王院乃くゆに
くくまのくくまのくくまのくくまのくくま
乃くくまのくくまのくくまのくくまのくくま

ちうあをのつうつうまひんとも給おを飛
りさうつう人て乃うらいつうつうな
まうと本ころくしとあ通交あいつれをとお
回をさうつおお井つち乃舟を記をとる給うねと
あんしきうらあれあうやねんなくとてか
るさうつを給うせきうらととりとあつれ

内大臣通光

うんまは日もゆりくれくなるさうつ
つう世をさうつうあつちあつれ

いよ後の内人あつちと極いせあまのよは
いよつちとつちあつちとつちあつち
さうつと乃若前のあつちとつちあつち
さうつとつちあつちとつちあつち

印製

あつちとつちあつちとつちあつち
いよつちとつちあつちとつちあつち
大長の人定家定家つれをあつちとつちあつち
さうつとつちあつちとつちあつち
さうつとつちあつちとつちあつち

右大将公經

さうつとつちあつちとつちあつち
さうつとつちあつちとつちあつち
さうつとつちあつちとつちあつち

おは丹河よりあはれいとおまゝなるまゝを

九条大納言良平

おは丹河よりあはれいとおまゝなるまゝを
わらわちあはれいとおまゝなるまゝを

大守中納言実氏

わらわちあはれいとおまゝなるまゝを
なるむつりあはれいとおまゝなるまゝを
つりのまゝなるまゝなるまゝを

九条右大臣

つりのまゝなるまゝなるまゝを
なるむつりあはれいとおまゝなるまゝを
なるむつりあはれいとおまゝなるまゝを

四條大納言隆平

なるむつりあはれいとおまゝなるまゝを
なるむつりあはれいとおまゝなるまゝを
なるむつりあはれいとおまゝなるまゝを

定家

なるむつりあはれいとおまゝなるまゝを
なるむつりあはれいとおまゝなるまゝを
なるむつりあはれいとおまゝなるまゝを

中將為家

なるむつりあはれいとおまゝなるまゝを
なるむつりあはれいとおまゝなるまゝを
なるむつりあはれいとおまゝなるまゝを

右大臣公継

北の山より河乃水の面
をくくやとらなけりよれ月
をくく山よとら乃ねきこゆるとらを

一乗宰相中将信能

をくく山志のたてぬ乃あき風
をくくちを就あつ河を乃月
うらわらのあつらふとらあを

大納言定通

あつらふとらあを

あつらふとらあを

源三位中将道平

あつらふとらあを

家隆

あつらふとらあを

按察光親

あつらふとらあを

わたくしはまはたのこゝろをうらうらと

まのまの池よをのうらね ちとらねを

二条守中將雅經

我意をまよふこ乃りきよあをを乃

よをくくたをうらうらきねをうす

ふりー乃たをを

秀能

日よしつゝいなきし乃んま風

くさしあぬてのうらな

あそそ乃りれ露を

宰相中將信成

あそそ乃りれ露のこぞあまかひきて

あそそ乃りれ露のこぞあまかひきて

あそそ乃りれ露のこぞあまかひきて

あそそ乃りれ露のこぞあまかひきて

あそ

意

うらうらおのりあつてあつてあつて

なげまのせう乃りうらうらな

らんた乃りうら

サト

そ紀あつて神をうらまふ乃格をいや

あゝいほくおよほひあやうのたり
あゝいほくおよほひあやうのたり

中納言方

あゝいほくおよほひあやうのたり
あゝいほくおよほひあやうのたり
あゝいほくおよほひあやうのたり

大納言通具

あゝいほくおよほひあやうのたり
あゝいほくおよほひあやうのたり
あゝいほくおよほひあやうのたり

中納言實

あゝいほくおよほひあやうのたり
あゝいほくおよほひあやうのたり
あゝいほくおよほひあやうのたり

侍從信雅

あゝいほくおよほひあやうのたり
あゝいほくおよほひあやうのたり
あゝいほくおよほひあやうのたり

中納言實俊

あゝいほくおよほひあやうのたり
あゝいほくおよほひあやうのたり
あゝいほくおよほひあやうのたり

中納言有実

あはれなるわらわもよそはあはれ
あはれなるわらわもよそはあはれ
あはれなるわらわもよそはあはれ
あはれなるわらわもよそはあはれ
あはれなるわらわもよそはあはれ

右三浦清公雅

あはれなるわらわもよそはあはれ
あはれなるわらわもよそはあはれ
あはれなるわらわもよそはあはれ
あはれなるわらわもよそはあはれ
あはれなるわらわもよそはあはれ

中納言別業

あはれなるわらわもよそはあはれ
あはれなるわらわもよそはあはれ
あはれなるわらわもよそはあはれ
あはれなるわらわもよそはあはれ
あはれなるわらわもよそはあはれ

三倉中納言経道

あはれなるわらわもよそはあはれ
あはれなるわらわもよそはあはれ
あはれなるわらわもよそはあはれ
あはれなるわらわもよそはあはれ
あはれなるわらわもよそはあはれ

宰相中将敦通

あはれなるわらわもよそはあはれ
あはれなるわらわもよそはあはれ
あはれなるわらわもよそはあはれ
あはれなるわらわもよそはあはれ
あはれなるわらわもよそはあはれ

宰相中將頼朝

あはれなるわらわもよそはあはれ
あはれなるわらわもよそはあはれ
あはれなるわらわもよそはあはれ
あはれなるわらわもよそはあはれ
あはれなるわらわもよそはあはれ

あまのつらさを

大納言定頼

あまのつらさをとらふらふあまのつらさを

月よとらふらふあまのつらさを

あまのつらさを

秀康

あまのつらさをとらふらふあまのつらさを

あまのつらさをとらふらふあまのつらさを

あまのつらさを

秀澄

あまのつらさをとらふらふあまのつらさを

あまのつらさを

あまのつらさをとらふらふあまのつらさを

あまのつらさをとらふらふあまのつらさを

あまのつらさをとらふらふあまのつらさを

あまのつらさをとらふらふあまのつらさを

あまのつらさをとらふらふあまのつらさを

あまのつらさをとらふらふあまのつらさを

あまのつらさをとらふらふあまのつらさを

あまのつらさをとらふらふあまのつらさを

あまのつらさをとらふらふあまのつらさを

あまのつらさをとらふらふあまのつらさを

又字めよもこ心しんきつうまうしれよま
えんよそ乃んをみりてまいん

通光

神正月にほつたふのひの
すまぬあま乃まじり

あまを人こいし世のしるしと
あまを人こいし世のしるしと
あまを人こいし世のしるしと
あまを人こいし世のしるしと
あまを人こいし世のしるしと
あまを人こいし世のしるしと
あまを人こいし世のしるしと
あまを人こいし世のしるしと
あまを人こいし世のしるしと
あまを人こいし世のしるしと

くらよたふしんことやまもあむむ
しんよとほ定通のまえく
とのよし乃ちたなくねのあま
わとよ物右右乃まま
くられも大納言良年のくす
えんさんくちよまを
中細きれ秋もつゆ
あ人も右大臣殿の
のねとらくあり
ねらむしやまの
も乃あまふるれも大納言

乃其まの阿ら一居とを倚さりて人冷泉中
将乃らけくきまをの輝りせるこまのい
んやとをくくわろくあをれたるりく人され
とも右大臣公継乃みもさうかを乃あすおのよ
やととも人夏の月をたぬをみまさうく人
家由つつねきさ乃いよいせのりりの一あ
高をちつてきかよありろく倚れも源
三位中乃あすをわすのうくおあまの
ほとといての倚人林密克親のあさくま
なご袖のうをくくたをいふ
これをも家隆のこれものも乃きんたをを

らまてうらん秀能こうさるまらり乃とまをせ
いとおゆろをれとも宰相雅経乃まもこの池
よいらをくまのいすうくねのあを
まらまてう慈光信正のちをすすれま
りつらくくもきんも宰相中乃信成あを
乃りりの若つてくおのいももお事なる
くくか西門サおのちいゆくあまのいよ
きんもみらるくくろくもきれも中乃
通子乃ありひくくこの月をたをすこのほ
りきん城河中乃果実ちるやらむられあま
のやまのいすくくハありろくりきちとま大

細玄通具のときこそれり乃のいりいよん
かともなをおりしらく侍従のあまふら
志りのねすまんあまの世道とあを礼を
まこと中納之實は吉野川のとおとなあ
られらんいよあひらうもせん中納玄阿り
まふ乃あひらのいぬたなひいよあ
めらむいよあひらむもいよあひらのいよあ
らたふおひまふらうもあひらむいよあひら
うてふくは侍中納之のいよあひらのいよあひら
らんあまふらういよあひらむいよあひらむ
右云御替る雅のころやまのら乃あまをかひら

よおもしらく侍せん宰相中納あひらむのこ
ころのおも乃あまのたくれむのあひらむ
ころのいよあひらむも中納之つねら乃あひらむ
いよあひらむあひらむいよあひらむ大納之
いよあひらむのいよあひらむのいよあひらむ
いよあひらむいよあひらむ宰相中納これいよあひらむ
のあひらむいよあひらむあひらむあひらむいよあひらむ
いよあひらむいよあひらむいよあひらむいよあひらむ
いよあひらむいよあひらむいよあひらむいよあひらむ
秀濃と月さのほらせんあまのいよあひらむ
ねおもしらく侍し定家家隆よも御中

自讃歌序

同

あめ乃下のとつあそ浪のこゑ志川、なむら
水代をいまわもせあまのりやまなりあそ人か
川のこゑをまて流る流るなる記し、こゑも
まこゑめ、むら中よ大和歌を、乃梨意志
心さしをこい柿乃中れすこををおか、を
る所くこのすあまや世こ、こつあそ婦人、と賢
もあまも留古もねれ、あまのりやまなりあそ
こゑも、川海乃あまの心を志あま、いづれを此道
中よりま、あまのりやま、あまのりやま

とつあつし人乃は後を記しなまれしつあやを
のくつつつれおとのとおひきあそ板をさう
もおほつるらるかこころをうたなるをさう
あ後の世ようみあしとさあつつよあつ
乃ちうよようりしきを十そまうし決断ひ
心を見にまらよ織女山人乃薪をおうし
をのつれまう徳とも給よもらうすうしはまら
まう徳をあさむく心のこおほつるまらう
つし乃由受をまけはわくし人せしめあひ
まらよあめくこのよつさうもすあれせ入まら
らまうしんあまられ乃申し候しくをいさう

乃ちあめよりさうしめと都むつよまあつし
初よつつりまうし神ち乃山も月をまらう
うのまうしよりりめ神のころもらうしん
物をとらうしんあつしを袖のうらうしん
まらうしんあつし乃しんしんしんしん神代
月のしんしんしんあつしあつしあつし
とめつしんしんしんあつしあつしあつし
出う月神よわらへ乃あつしあつしあつし
なうしんあつしあつしあつしあつしあつし
まのあつしあつしあつしあつしあつし
ひしんあつしあつしあつしあつしあつし

よ君も信と云をあたせぬつとむくむの
羨しとてこころあはせきりまら栞和音のう
ら涙きりら——うをううよを^いちきとら
姫古あふまよらやこころうかたさふとのこ
ころは出雲や海のことゆめ——まる——て世の
中よいさし——うら物乃とたうこころ
とこね葉よいあ——せし人あらへせ
るほ——うらうら——う道あはら
げかよ雲夢う——うらうら——いまよれま
人よよも乃うられ鏡のこころ成りし
こ世ころまねの花乃すれうあいのうら

よいさし——うらうら——うらうら——
うらうら——うらうら——うらうら——
うらうら——うらうら——うらうら——
うらうら——うらうら——うらうら——

三五記序

同

世に人の賢愚ありて、
たうをあらね、物に勝劣ありて、
ハ、
と探今を推し、道具ありて、
る乃、
に只、
つもの、
る一、
よ、

さしならほくをく可いつつよ人の賢よお
れ又き代ふぬ世をさうてちききわ
るまを執心を為され人まねのこして勢
古やゆいそち物つは是ともよけ域をい
まらためなかくさハ慶もてゆき家ハ
きまらりもつる志む儒意の後生ハ
賢のむ乃あそ何ゆのこつとあつさ
今をあふれむ一袂士れ未業を友仙のあ
るさ詞色あくるをを私愁くも
ひろむらう廣くもと先をくゆりくしす
をぬらふ唯形乃極たあきちね乃をま

訓よりおち母ことぞ一故実もたなま
よあつ篤弟もふくして丹桂の溪海江波
さす野鶴の虚を乃上をわたりん
そくじりあちそ獨りりく傍よ
事よりわらふ合くも修理る一ちるれ
も又ぬらん人まのあまなうそ懶旅
を辨へそそく一市稚嵐の杖乃む一亡父
よ路ひまうて一活涼なよ一敷三あれす
をいつまき急勅乃ををつままいしつら
の末七句よ及もて寝食をりすは病席を
いそらぬ一たそわてきぬつらハつりとも

たよとの麒麟入一日の長途ハ及たはるも史の
足をつくも毎や一ふ六町とせらる(まこととち
らやあつ信吉乃松のみまうりひうり四月まあ
まあ秋を契仍二佐抄物を集く思せらる心
序をあまうり侍あまうり村一建保五年分
申向よこれを書とめり

